室見川を活かした住民参加型のまちづくりに関する研究
～早良区魅力づくり事業を事例として～

福岡大学工学部　学生員○平塚祐介　　福岡大学工学部　正会員　渡辺亮一
福岡大学工学部　正会員　山崎惟義　　早良区総務部まちづくり企画課　秋山仁孝

1.はじめに

元来、川は「川おもて」と言われるように、まちとともにあり、人々の生活の身近なところにあった。しかしながら、1970 年代以降の治水優先の河川整備が、都市部における川のあり方を単なる排水路にしてしまった。近年、川と触れ合うことによって心の豊かさを取り戻そうという流れが盛んになっており、都市部を流れる川の役割が見直されつつある。このような流れの中で、単に川を物理的にいじるだけの川づくりをするのではなく、まちづくりという広い視野で見ていく必要性が生じており、様々な取り組みがなされている。

我々の研究室では、ふれあい室見川や水生生物観察会、親子ホタル学習会などの住民参加型の川づくりイベントを通して早良区魅力づくり事業に率先して携わっている（写真１）。本研究では、実際に早良区魅力づくり事業に参加してみて、この事業が継続して行われていくために、大学生の役割が、今後の展開にどのような効果をもたらしているか、今後、大学生として住民参加型の取り組みにどのように参加して行くのかを明らかにすることを目指し、目的を以下の 2 点に設定した。

① 早良区魅力づくり推進事業で、大学生が企画・運営に携わった後のこの事業の変化を検討し、成否を見出すこと。
② 今後もイベントが継続して行われ、次世代を担うこどもたちに継承し続けていくための手法を見出すこと。

写真１　ふれあい室見川フォーラム

写真２　ふれあい室見川

2.研究概要

室見川は福岡都市圏を流れる 2 級河川である。源流から河口までが福岡市域内で完結する唯一の河川である。市民の生活用水の供給源として、都市成長の基盤を担い、またその川辺は市民のかけがえのない憩いの場として、あるいはスポーツ・レクリエーションの場として、市民活力の再生に多大な役割を果たしてきた。地元早良区では、平成 12 年までの十年余、一区一美事業として「さわら・水と緑とほたるの里づくり」を推進し、平成 13 年度からは、新たに「区の魅力づくり事業」として一区一美事業で培ってきた室見川に関する経験を活用した様々な事業が行われている。

2.1 ふれあい室見川

室見川の緑地・河畔公園（室見新橋付近）を開催場所として、毎年夏に一回行われるイベントである。室見川を活かし、川底でのドッヂボールや石鹸づくり、たこ作り、太鼓の演奏などを行う催しである。市民と行政の「協働」により活動を行い、室見川を活かして、人と人とのふれあいを育み深めていく事やふるさと・郷土への愛着を育み、ふれあいの精神を次世代を担う子供たちに継承していく事を目的とする（写真 2)。

写真３　水生生物観察会

2.2 水生生物観察会

室見川上流の滝見橋付近及び下流の橋本橋付近、曲渕小学校講堂を開催場所とし、水生生物を採取し観察するイベントである。川遊びをしながら、川にすむ虫や魚を観察する事で自然に親しみ大切にする心を養うとともに、自然環境の重要性を認識してもらう事を目的とする(写真 3)。

写真４　親子ホタル学習会

2.3 ホタル関連事業

講師の方を招いてのホタルについての学習や観察、ホタル鑑賞シーズンなどにマナーアップを呼びかける啓発活動を行うものである。ホタルについての学習や観察を通して、自然の大切さや自然の営みのすばらしさを理解してもらうとともに、環境の保全や創造に積極的に参加してもらう事を目的とする(写真 4)。

2.4 研究の進め方

水生生物観察会、ふれあい室見川などを通して、早良区魅力づくり事業に大学生として携った立場から研究を進めている。実際に私たち大学生が平成 16 年度から企画・運営の段階から携っている。そこで、16 年以降の変化について検討する。

・「ふれあい室見川」：平成 16 年度から、部会制度が導入され、参加の領域を大きく広げている。部会制度とは、ふれあい室見川の準備段階において、競技・安全・広報・総務の 4 つの部会を設けて、イベントの企画・運営の段階から住民が携わるという趣旨のものである。その中で、私たちがその一員あるいはリーダーとして率先して、部会をとりまとめている。平成 17 年度からの事業報告書においては、大学生を中心として作成している。このように、若年層が企画の段階から参加しやすい環境となり、「リーダーシップを持って指導できる人材を育てる」状況が整いつつあると言える。

また、図 1 からも明らかなように、ふれあい室見川への当日参加者の居住地別構成を見てみると、2004 年から 2005 年にかけて、早良区以外からの参加者も増え、他地域からの関心も高まっていることが分かる。

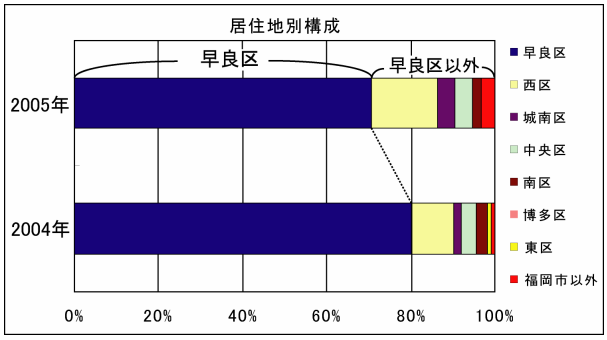

図1　ふれあい室見川参加者居住地別構成

・「水生生物観察会」：平成 16 年度までは、上流のみで観察会は行われていた。環境学習という考えが非常に強いイベントなので、それを肌で感じてもらうことが重要である。そのため、平成 17 年度からは上流（滝見橋付近）だけでなく、下流（橋本橋付近）でも採取・観察を始めた。「水生生物観察会」は、早良区が、環境局の取り組みに乗りかかっているという状況であるため、これを打開しなければならない。そこで、平成 17 年度には大学生が企画を行った。

・「親子ホタル学習会」：このイベントに関しては、企画・運営の段階から携わることはなかったが、学習会当日の大学生の参加人数は、平成 16 年度に比べると増加し、参加者の誘導などボランティアスタッフとしての役割を担った。

3. 結果及び考察

前述してきたように、私たち福岡大学の学生は、「ふれあい室見川」・「水生生物観察会」・「親子ホタル学習会」に、非常に関心を持ち積極的に参画することで、大学生として活躍する場を与えて頂いている。早良区魅力づくり事業は、福岡市において先進的な事例であると考えられるが、そのように言われるのは、‘‘年々、発展を続けていること’’にあると考えられる。そして、それにともなって他地域からの関心も徐々に高まりつつある。その時に大学生である私達が、リーダーシップをもって人を引っ張り、物事を円滑に進め、早良魅力づくり事業の魅力を十分に伝えることが出来なければならない。このような活動を行っていくことで、更に住民手づくりの輪を広げ、後世まで続くようなまちづくりを行うことが可能となると考えられる。

また、観察会等で必要な専門知識等を学識経験者に依頼することは従来からよく見られる、しかしそのようなイベントに学生が直接加わることはこれまであまり事例がなかった。このようなイベントに学生が企画・運営の段階から積極的に関わることによって、行政側（早良区）だけでなく大学側にとっても十分なメリットが生まれてくるものと考えられる。

4. 結論

「早良区魅力づくり事業」の様々なイベントについては、まちづくりとして機能するための要素は多くある中で、現段階では、まちづくりの発展段階にあり、様々な課題に対し、もう一歩踏み出すために試行錯誤している状況だと考えられる。そのことは、平成 16 年度から部会制度に取り組み始めたことからも伺える。そこで、その一歩を率先して踏み出すための役割を大学生が担うことで、課題解決および、当事業を住民自身が主体となって行っていくきっかけとなるとともに、継続及び新たな展開へと持ち込むことが出来る。つまり、「リーダーシップを持って指導できる人材を育て続ける」ということが、今後の事業の継続につながっていくものだと考えられる。

参考文献

樋口明彦＋川からのまちづくり研究会：川づくりをまちづくりに、学芸出版社、2003.
「いい川・いい川づくり」研究会：私たちの「いい川・いい川づくり」最前線、学芸出版社、2004.
環境省総合環境政策局：持続可能な地域づくりのためのガイドブック、平成 14 年
さわら魅力づくり推進委員会：区の魅力づくり事業・ワークショップ報告書、平成 14 年.
さわら魅力づくり推進委員会：「プロジェクト Muromi」、事業報告書、平成 14～16 年.
早良区まちづくり活動協議会・早良区役所：早良区まちづくり活動支援事業レポート、平成 13 年.
パシッフィックコンサルタンツ(株)：むろみんフェア＆むろみんピック来場者アンケート、平成 16、17 年.
早良区地域づくり協議会：住みよい早良区地域づくりアンケート報告書、平成 12 年